

明治期の日本語会話教材

吉岡英幸

キーワード

明治期 会話教材 場面 話題 表現意図

1. 明治期の会話教材

日本語教材は、明治期に既に数多く開発されていた。筆者はこれまで100種類余りの明治期の日本語教材の調査を行ったが、何を教えることを目的に作成されたかという視点で見ると、文法体系を理解させることを主眼とした文法解説教材、文型的な学習項目を中心に構成された教材、読本と呼ばれていた読解教材、かなや漢字学習のための文字教材、そして会話教材に大別できる。会話教材は、それぞれの章や課をある場面や話題などによって構成し、そこで行われるであろう会話のモデルや表現の例を示した教材である。

本稿の目的は、明治期の会話教材がどのような場面や話題によって構成されているかということ进行调查し、明治期の会話教材の特徴を明らかにしようとするものである。具体的には、会話教材の各章や課などの部立てがどのように分類されているかを見ることにより、明治期では会話に重要だと思われていた場面や話題、表現意図はどのようなものだったかを探ろうというものである。したがって、台湾総督府の『台湾適用会話入門』(M33)や『国民読本参照国語科話方教材』(M33)など、教材名に『会話』や『話方』とあっても、文型的な学習項目をそれぞれの課に配し易から難へと積み上げていく構成の教材は対象としなかった。また、文法教材を主たる目的に編纂された教材であっても、一つの章を立てて場面や話題ごとに会話例をあげているものがある場合は、その章のみを調査対象とした。しかし、会話教材であっても、菊池勉『実用日語篇』(M39)や井上翠『東語会話大成』(M40)のように、各課が場面や話題で

分類されておらず「これは何ですか」、「あなたは誰ですか」などのような題のもとに、場面や話題が明確でない会話例がある教材は対象外とした。菊池金正『漢訳学校会話編』(M39)のように場面が学校に限定されているものも、今回の調査目的に合わないので対象からはずした。

2. 調査対象の会話教材

調査対象とした教材は、場面や話題を中心に分類してあり、その項目ごとに会話や表現の例が示されているものである。したがって、調査は原則としてその部立ての項目を分類集計したが、その部立てがおおまかな場合は、会話の内容を検討し下位分類を行ったものもある。対象教材は、次のa～rの18種類の教材である。以下編纂者、書名、作成年、そして、簡単な概要を記す。

a) 富田源太郎：STRANGER'S HANDBOOK OF THE JAPANESE LANGUAGE (M26)

全体は英和辞典的構成で、DIALOGUESの章を対象とする。場面別に英語とローマ字表記の日本語が対照された会話文がある。

b) KELLY & WALSH：HANDBOOK OF THE JAPANESE LANGUAGE FOR THE USE OF TOURISTS AND RESIDENTS (M29)

発音、動詞、数詞などの後にある、項目ごとの語彙・会話のローマ字と英訳の章を対象とする。各項目は場面が中心であるが、不快、非難などを表す表現などもある。

c) 唐寶鏗，戢翼翬『東語正規』(M33)

全体は巻Ⅰ「語法」、巻Ⅱ「散語」「問答」、巻Ⅲ「語訣」となっているが、ここでは場面を中心として例文を列挙した「問答」の章を対象とした。

d) 黒田太久馬：THE SPOKEN LANGUAGE OF JAPAN；A COURSE OF EXERCISES IN FAMILIAR CONVERSATION (M34)

全体はⅠが25課あり、各課とも本文会話、NOTES, EXERCISEの構成、Ⅱが文法解説、ⅢがDIALOGUESとなっており、各場面ごとの会話のローマ字表記とその英訳で構成されているⅢを対象とする。

e) 新智社編集局『東語完璧』(M36)

全体は1編「予習」、2編「説話法標準」、3編「問答法標準」、4編「会話」、

5編「練習問題訳解」、6編「単語」という構成となっており、4編「会話」の章を対象とする。各項目は場面を中心とした会話文とその中国語訳で構成されている。また、項目の中国語の説明もある。

f) 赤田開太, 里見純吉: HOW TO SPEAK JAPANESE CORRECTLY; SEISOKU NIHON-GO-GAKU (M36)

全体はⅠが助詞や疑問詞などの解説, Ⅱが各品詞や語用などの解説, Ⅲが「JAPANESE & ENGLISH CONVERSATION」であり, Ⅲを対象とする。各項目は場面が中心で, ローマ字表記の会話文とその英訳がある。

g) E. P. PRENTYS, KAMETARO SASAMOTO: JAPANESE FOR DAILY USE COMMON-SENSE SERIES (M37)

9課分の場面別のローマ字の本文会話と英語の対訳で構成, 全課が対象。

h) 平岩道知『日華会話筈要』(M38)

全体は「単語の部」と「会話の部」で構成されており, 後者を対象とする。場面を中心とした項目ごとの会話文とその中国語訳がある。

i) 金太仁作『東語集成全』(M39)

全体は上巻が「日本語文典」, 中巻が「語彙」, 下巻が「語法」と「会話」の3巻で構成。下巻の「会話」の章の場面を中心とした45の会話文を対象とする。会話文には中国語の解説と対訳がある。

j) 葛夢樸『東語簡要』(M39)

全体は「音韻」「散語」「普通語」の3編の構成であり, 「普通語」の場面を中心とした会話文とその中国語訳で構成されているものを対象とする。

k) 唐木歌吉『中日対照実用会話篇』(M39)

全体は中国人の主人公2人が東京に着いてから帰国までのストーリーになっている各課の本文で構成されている。各課の本文は場面を中心とした会話文とその中国語訳。全課を対象とする。

l) 中堂謙吉『新式東語課本』1巻(M39), 2巻(M40)

各課は本文, 練習, 会話で構成。1章1節が「目が覚める。布団をまくる。起きる。布団をたたむ。寝巻きを脱ぐ。着物を着る。帯をしめる…」のように, 本文はグアンのチェーンメソッドと同じような一連の文とその中国語訳で構成されている。そのため, 会話が行われている場面が明確である本文を対象とする。

m) 松平康国『日清対訳』(M40)

全体は1巻の音声・文字, 2巻の名詞語彙, 3巻の品詞ごとの語彙, 4巻の散語・対話の構成となっている。場面を中心とした会話文とその中国語の対訳で構成されている4巻の「対話」の篇を対象とする。

n) 鄭雲復『独習日語正則』(M40)

全体は話題ごとに分類され, その話題に関連した語彙と表現例の文とその朝鮮語訳を列挙したもの。全体を対象とする。

o) 呉人達『東語大観』(M40)

全体は1巻が「語法」, 2巻が「語例」, 3巻が「普通応用語」という構成。会話文と中国語訳で構成されている3巻を対象とする。

p) 林圭『日本語学音・語篇』(M43)

全体は1編が「字・音」, 2編が「言語」, 3編が「会話」の構成で, 場面を中心とした会話文と朝鮮語訳や解説で構成されている3編の「会話」を対象とする。

q) 唯一書館編集部『日語正編全』(M44)

1章「文字部」を除いた2章「挨拶」から14章「演説部」までを対象とする。各章はそれぞれの小項目による場面や話題による甲乙の会話文とその朝鮮語訳により構成されている。

r) 伊藤伊吉『独学日語教範』(M45)

全体は1編が「文字, 数字用法, 語法及連語」, 第2編が「会話」, 3編が「単語」の構成となっており, 2編を対象とする。19課分の場面や話題による分類とそれに関する会話文及びその朝鮮語訳と解説による構成となっている。

3. 会話教材の内容分類

18種類の会話教材の各課や項目ごとの題や会話内容を調査分析し整理すると, 主にどこで話されているか, またどのような状況での話かという観点から項目を立てたもの(実際にはあいまいで特定できない場合もある), 何について話しているかというという観点から項目を立てたもの, コミュニケーション上どのような機能を持たせるかという観点から項目を立てたものの, 三つに大別することができる。最初の分類を「場面」, 2番目の分類を「話題」, 3番目の分類を「表現意図」と呼ぶことにする。そして, 「場面」はさらにどこで行われ

る会話かが特定できる項目を「場所」、日常挨拶やお祝い・お悔やみなど、ある状況では決まった表現が使用されるような特定の状況の項目を「状況」として二つに分けた。また、それぞれの下位項目として第一分類を、更にその下位分類を第二分類とした。ただし、「場面」の中の「場所」の第二分類の中には、会話の内容を分析して、特定の場所で行われた行為やトピックなどの内容がわかるものは参考に（ ）に入れて示した。18種類の教材の分類を集計すると以下のようなになる。2種類以上の教材に共通して出てくるものをあげる。

I. 場面

A. 場所

第一分類	第二分類	計	教材
1 家		11	c, d, e, f, g, h, i, k, l, o, r
	(食事)	7	c, d, e, f, h, k, l
	(起床)	4	c, f, h, o
	(器財)	4	c, g, o, r
	(客のもてなし)	4	d, e, i, r
	(就寝)	4	c, f, h, l
	(住まい, 部屋)	3	c, o, r
	(洗面)	2	c, h
	(そうじ)	2	c, l
	(外出)	2	d, k
2 下宿, 寄宿舍		3	i, j, k
3 路上, 外出先		15	a, b, c, d, e, f, h, i, j, k, m, o, p, q, r
	(散歩)	10	c, d, e, h, i, k, m, o, q, r
	(道聞き)	9	a, b, e, f, h, j, m, o, p
	(部屋探し)	5	i, j, k, m, p
	(引越し)	3	e, k, o
	(見物)	3	a, i, o
	(路上)	2	m, p
4 訪問先		12	a, c, d, e, f, h, i, k, m, o, p, r
5 学校		11	c, e, i, j, k, l, m, n, o, p, r
	(学校, 教育等)	11	c, e, i, j, k, l, m, n, o, p, r
	(語学授業)	3	e, p, r
	(試験)	2	i, p
	(学校参観)	2	i, k

6 公共施設等		15	b, c, d, e, g, h, i, k, l, m, n, o, p, q, r
	1) 病院等	11	b, d, e, h, i, k, m, n, o, q, r
	2) 郵便局	7	e, g, i, l, n, p, r
	3) 電信局	5	e, i, l, n, r
	4) 税関	5	b, c, d, e, g
	5) 銀行	3	d, e, p
	6) 役所	2	e, r
7 宿, ホテル		9	a, b, d, e, f, g, h, l, q
	(食事)	4	a, b, f, g
	(就寝)	3	a, b, d
	(精算)	3	a, b, f
	(ふろ)	3	b, d, h
	(あんま)	2	a, b
	(起床)	2	a, b
8 店等		14	a, b, c, d, e, g, h, i, j, k, l, o, p, q
	1) 洋服屋	7	d, e, h, i, j, k, p
	2) 理髪店	5	e, j, k, o, p
	3) 靴屋	5	d, e, j, k, p
	4) 本屋	5	e, h, i, j, p
	5) 時計屋	5	e, h, j, k, p
	6) レストラン	3	d, h, k
	7) 骨董屋	2	b, e
	8) 古本屋	2	h, j
	9) 風呂屋	2	o, p
	(勘定)	3	a, e, k
	(注文)	2	a, h
9 乗り物等		16	a, b, c, e, f, g, h, i, j, k, l, n, o, p, q, r
	1) 人力車	12	a, b, c, e, g, h, j, k, l, o, p, r
	2) 汽車	11	a, b, e, f, h, i, k, l, n, o, r
	3) 船	10	b, c, e, h, i, l, n, o, q, r
	4) 路面電車	2	o, q
	5) 馬車	2	a, e
	6) 駅	3	a, c, l

B. 状況

1 紹介等		11	b, c, d, f, h, i, m, o, p, q, r
	1) 紹介	9	b, c, f, h, i, m, p, q, r
	2) 日常挨拶	4	b, d, o, q
	3) いとまごい	2	i, o

2 見舞い		9	c, d, e, h, i, k, m, p, q
	1) 病氣見舞い	9	c, d, e, h, i, k, m, p, q
	2) 火事見舞い	2	p, q
	3) 洪水見舞い	2	p, q
3 慶弔		9	c, e, h, i, k, m, p, q, r
	1) 年賀	7	c, e, h, k, m, p, r
	2) 結婚祝い	6	c, e, h, p, q, r
	3) 出産祝い	6	c, e, h, p, q, r
	4) 卒業, 入学祝い	5	c, e, h, i, p
	5) 昇進, 任官祝い	4	c, e, i, q
6) お悔やみ	3	h, p, r	
4 別れ		6	c, e, h, i, k, p
	1) 帰国	5	c, e, h, k, p
	2) 外遊, 留学	3	c, e, i
5 行事, 会		5	i, k, o, p, q
	1) 送別会等	5	i, k, o, p, q
	2) 演説会, 討論会	3	i, k, p
	3) 卒業式	2	k, q
6 電話		3	i, l, r

II. 話題

1 自然, 地理等		12	c, e, f, g, j, l, m, n, o, p, q, r
	1) 四季	9	c, e, l, m, n, o, p, q, r
	2) 天候	8	c, e, f, j, l, m, n, o
	3) 曜日, 月日	5	c, g, n, q, r
	4) 時間	4	c, e, n, o
	5) 地理	3	n, o, r
	6) 動物	3	n, o, r
	7) 植物	3	n, o, r
2 産業		6	c, l, n, p, q, r
	1) 商業	6	c, l, n, p, q, r
	2) 農業	5	l, n, p, q, r
3 政治, 法律等		6	d, e, i, l, n, o
	1) 新聞	3	d, e, i
	2) 政治	2	d, n
	3) 法律	2	n, o

4 その他		12	a, e, i, j, k, l, m, n, o, p, q, r
	1) 旅行	7	a, l, m, o, p, q, r
	2) 教育, 学問	7	j, l, n, o, p, q, r
	3) 食生活	4	j, n, o, r
	4) 娯楽, 趣味	3	e, o, r
	5) 家屋, 器財	3	n, o, r
	6) 身体	3	n, o, r
	7) 手紙	3	k, l, o
	8) 盗難	3	e, i, k
	9) 服飾	2	n, r
	10) 国, 都市	2	o, q
	11) 広告	2	e, l

Ⅲ. 表現意図

1 依頼		4	e, h, i, p
2 命令, 指示		3	e, m, o
3 借用, 返済		3	e, h, i
4 慰め, 励まし		2	f, h
5 相談		2	e, h

4. 明治期の会話教材の特徴

4-1 対象別, 年代別から見た会話教材の特徴

どの国の学習者を対象として作成されたかという母語話者別に見た会話教材は, 次のようになる。

- 1) 英語母語話者対象教材…… a, b, d, f, g
- 2) 中国語母語話者対象教材… c, e, h, i, j, k, l, m, o
- 3) 朝鮮語母語話者対象教材… n, p, q, r

中国語を母語とする学習者のための教材が9, 英語を母語とする学習のための教材が5, 朝鮮語を母語とする学習者のための教材が4である。作成された年代別に見ると, 英語母語話者のためのものが明治初年から30年代まで, 中国語母語話者のためのものが明治30年代以降, 朝鮮語母語話者のためのものが大体明治40年代になってから作成されているといえる。量的には中国語母語話者対象のものが多く, 時代的には大体英語から中国語, そして朝鮮語と移っていったと言える。

4-2 場面、話題、表現意図などから見た特徴

「場面」の「場所」の中で半分以上の教材に出てくるものは多い順に、①乗り物等 (16)、②公共施設等 (15)、路上、外出先 (15)、④店等 (14)、⑤訪問先 (12)、⑥学校 (11)、家 (11) となっている。現代の教材の場面や話題を調査した日本語教育学会編『日本語教育機関におけるコース・デザイン』(凡人社、1991年)によると、乗り物ではバス、電車が1位となっているが、明治期の場合汽車、船より人力車が多いのは時代を反映していると言えよう。公共施設の場合、病院が1位であるのは同じであるが、現代の教材では2位となっている映画館・劇場は明治期には出てこない。また、電信局が5あり電話の3より多いのも電報が大きな伝達手段であった当時の時代背景からである。店の中では洋服屋が1位であるのは、外国人にとって洋服の仕立ての需要が多かったためと思われるが、現代の教材の1位であるデパート・スーパーは当然ない。学校では、語学、算術、体操の授業や試験、入学の手続きなどの場面が取り上げられており、留学生を対象とした教材が多いことによるものであろう。「状況」では、日常挨拶の項目を立てたものは4しかないが、多くの教材はそれぞれ他の項目の中で挨拶表現を入れている。紹介 (9)、病気見舞い (9)、が多いのは現代と同様であるが、年賀 (7)、結婚祝い (6)、出産祝い (6)などを3分の1以上の教材が取り上げているのは興味深い。また、会合では送別会、幹事会、同郷会、忘年会、演説会、討論会、同窓会、研究会など多種の会が取り上げられている。「話題」の中で四季、天候、曜日・月日、時間などが多いのは、日常の挨拶表現や語彙指導の配慮から組み込まれたものである。項目を見渡しても自然科学、歴史、社会、芸術などの各分野のバランスがとれているとは言い難く、任意に項目が選ばれた感が強い。「表現意図」の1位の依頼は、保証人になってほしい、絵がほしい、口添えを頼みたいなどの内容。2位の命令・指示は、使用人に対する表現例を示すことを意図したものである。ただ、これらはすべてが依頼や命令として項目が明示されたものではなく会話内容などから判断して入れたものもある。明治期の編纂者が現代のように表現意図に対する認識があったとは思えない。しかし、eが場面や話題のほかに「絵を頼む」「借用と返却」「疑念と請け合い」などを、fが場面の項目を立てる中で「慰めと励まし」を、hが種々の場面を設定しながら「貸し借り」「返却」「慰

め」「詫び」などの項目を立てていることにむしろ注目すべきである。未整理ではあるが、会話のための教材には場面や話題だけでなく、こうした視点が必要であると既に明治期の編纂者が考えていたことを評価すべきであろう。

18種類の教材の中で場面などによる題を立て、対話形式にしたものが15種類で、ただ題をつけその題に関連した文を前後の関係なく列挙したものがc, 1, nの3種類である。対話形式をとっているものも、

- e ・ 毎日何時ニ起キナサイマスカ
- ・ 大概五時デゴザイマス
- ・ 私ハ六時ニ起キマス
- ・ 朝飯ニハ何ヲ召上リマスカ
- ・ 「コーヒー」ト卵ヲ下サイ (「朝飯」の冒頭部分、以下省略)

などのように、二人の人物の性別、年齢、関係などはあいまいであり、会話のやりとりも自然ではない。現代の教材に見られるような現実の場面に即した自然な会話とは言い難い。もっとも、登場人物のあいまいさや会話の不自然さという意味では、戦後のというよりごく最近まで多くの初級教材がこうした特徴を持っていた。例えば1976年度版の『日本語 I』（東京外国語語大学付属日本語学校）では、

- ・ あなたは あさ 早く おきますか。
- ・ はい、わたしは あさ 早く おきます。
- ・ あなたは あさ なん時に おきますか。
- ・ わたしは あさ 六時に おきます。(8課の冒頭部分、以下省略)

となっており、性別や二人の関係などの情報はここからは読み取れないし、応答にすべて主語を入れるなど、あまり自然な会話とは言えない。ただ、戦後の教材の場合は、文法・文型事項を学習項目の中心にすえてそれを各課に配した。会話本文はその課の文法・文型項目のモデル文を例示する場であり、場面に即した自然さというものはむしろ意図的に排除され、抽象化された場面設定が行われた。そこには直接法によって文法・文型の習得を中心に、易から難への積み重ね方式をとるという教育方針の背景があった。そのためにやや不自然であっても、上記のような会話文が使われたのである。これに対し明治期の会話教材の場合、18種類の教材すべてに対訳がついており、ほとんどが教師のもと

で使用する教科書というより、むしろ自学自習を想定して作成されたものだと考えられる。そのためには、より具体的な場面で使用される自然な会話表現を示すほうが目的に合うはずである。既に見たように場面や話題それに1部ではあるが表現意図の項目を立てて会話を示しており、そうした編纂意図はあったと思われるが、会話文自体はまだ不自然なところも多く、選ばれた文もかなり恣意的である。明治期の会話教材は場面などによる題を立て対話形式にしたものでも、場面や話題ごとの表現用例集と見るべきものが多いとすることができるのである。

参考文献

関正昭（1997）『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

関正昭，平高史也編（1997）『日本語教育史』アルク

吉岡英幸（1999）「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院